

## 論文

### 小学校「外国語活動」のための現職教員校内研修の試み

#### An attempt of in-service teacher training for foreign language activities at elementary school

清水律子<sup>1)</sup>、久保田靖子<sup>1)</sup>、中野香<sup>1)</sup>

Ritsuko Shimizu, Yasuko Kubota, and Kaori Nakano

キーワード: 外国語活動 校内研修 英語運用力

Key Words: foreign language activities, in-service training, English communication abilities

#### 1 はじめに

本研究は、2009(平成21)年8月から2010(平成22)年3月にかけて実施した「小学校外国語活動講座 2009」および「小学校外国語活動講座 2010」(以下、本講座という)について、その設計と実施結果を報告し、小学校教職員の英語使用感覚と、今後求められる研修内容を探ることを目的とする。

2008(平成20)年3月、『小学校学習指導要領』の改訂が告示され、2011年度4月から、全国の小学校における「外国語活動」の実施が決定した。これに合わせて、文部科学省による全国の指導主事らを対象とした指導者養成研修が行われ、続いて各市町村の教育委員会では、中核教員を対象とした研修が行われた。本講座の対象地域においても、2008年度と2009年度に各5日間、「小学校外国語活動中核教員研修講座」が実施された。研修の目的は「外国語活動の基本理念等を理解するとともに、授業指導力の向上および英語運用力の向上を図ることと、受講した中核教員が各小学校において、校長・教頭の支援のもと、平成22年度までに2年間で30時間程度の校内研修を計画的に実施することができるようにすること」<sup>(1)</sup>であった。中核教員は、各学校で2008年度と2009年度にそれぞれ1名ずつ指名され、中核教員研修を受講する。そこで学んだことをもとに、各勤務校で実情を踏まえた校内研修を企画・実施し、勤務校の教員全員の指導にあたるものとされた。こうして、教員研修センターにおける指導者養成研修の内容が、中核教員研修を経て、全国の現場の小学校教員に伝えられる体制がとられた。

文部科学省の調査<sup>(2)</sup>では、2007(平成19)年度には全体の97%を超える小学校で既

<sup>1)</sup> 山陽学園大学 総合人間学部 言語文化学科

に英語活動が実施されているものの、その実施時間数や指導形態などには大きな差があることが報告されている。本講座の対象地域においても、過去に英語活動などを行った経験が少ない学校では、校内研修に課せられた課題の大きさに戸惑う様子がみられた。外部から講師を招くしくみや予算措置もなく、各学校がそれぞれの裁量で対応することが求められていた。各地の大学等では「外国語活動」に関する講座も開かれていたが、これらは希望者を対象とした集合型の研修であり、校内研修として活用することは事実上不可能であった。

このような当時の状況に鑑み、著者らは英語教育を通じた地域貢献の一環として、「外国語活動」校内研修のための出張講座の企画に着手した。対象は市内の全ての公立小学校とし、特に英語活動経験の少ない小学校の支援を重視して設計に取り組んだ。より多くの小学校が利用できるように講座を複数準備し、その中から各学校が必要とするものを選択して申し込む方法をとった。また、校内研修の性質上、受講者を移動させることは困難であるため、実施期間を設定して個別に日程調整を行い、所定の日には筆者らが学校を訪問し、校内の一室を借りて講座を実施する形態をとった。

## 2 事前調査 その1

2008年度当時、県や市町村の教育委員会などを中心に、各大学などでも小学校教員を対象とした「外国語活動」の研修や研究会が実施されていた。それらは、授業目的の理解、カリキュラムの編成、単元や授業計画、歌やゲーム、絵本などを用いた英語活動、英語ノートの活用例、教室英語の練習、ALT などによる活動体験など、「外国語活動」の実施にあたり広範囲に総合的に学ぶものが多かった。これらは、少なくとも1日数時間以上、多い場合は数日から数ヶ月に渡り、継続して研修するものであった。これらの希望者集合型の講座とは異なり、出張型校内研修講座は一回90分以内で完結し、かつ役立つ内容でなければならない。また、校内の全教員が受講することから、より多くの教員の需要に応える内容であることが望ましい。さらに、様々な英語力と英語学習経験を持つ教員に対応すべく、実施方法を工夫する必要がある。そこで、小学校教員の研修需要を探ることを目的に、全国規模の調査や研究報告などを調べると同時に、本講座対象地域の現場教員に研修内容についての聞き取り調査を行った。

2006(平成18)年に英語活動を実施した全国の公立小学校を対象とした調査<sup>(3)</sup>によると、十分な条件整備がなされていない項目として、7割以上の学校が「教材」「カリキュラム」「教員の英語力」を挙げている。特に課題だと感じている項目としては、「指導する教員の英語力」を挙げた学校が全体の4割を超えて最も多く、この傾向は、高学年における英語活動の年間実施時間数に関わらず、一定である。次に多くの学校が課題として挙げているのは「準備の時間の不足」「カリキュラム」「教員研修」であった。一方、2007年に全国の公立小学校を対象とした研修内容の調査<sup>(4)</sup>では、7割以上の教員が必要とする研修として「指導法」を挙げ、5割を遥かに超える教員が「英語力向上」と「指導計画」を挙げている。これらの調査が行われた時点では、「総合的学習の時間」の一部として英語活動が行われており、「外国語活動」とは目的が異なるものの、現場では多くの教員が自らの英語力に不安を感じている状況が浮かび上がってくる。同時に、実際の指導のしかた、教材、指導計画など、授業に直結した準備を早急に整えることを求める声が強いことが分かる。

松畑他<sup>(5)</sup>が研修後に受講者を対象に行った調査によると、最も多くの受講者が「今後特に役立つ」「もっと学びたい」と回答した項目は、ゲームやチャンツなどの「実践的指導スキル」であり、続いて、教室英語や発音などの「実践的英語能力」であった。また、西崎<sup>(6)</sup>は研修参加者の不安を調査し、「英語の発音」と「英語の流暢さ」が不安要因の上位3位までに挙がっていることを報告している。この傾向は、指導形態に関わらず共通して見られるが、特に単独指導経験がない教員の間で、英語力に関する不安を持つ者の割合が高いと言う。一方、校内研修として希望する研修内容を尋ねたところ、一位は「授業の流れ」であるのに対し、二位は単独指導経験の有無によって異なった結果となっている。不安要因と比較して、校内研修の方が指導経験の影響を強くうけることが報告されており、学校の条件整備状況によって校内研修に必要な内容が異なることが示唆されている。これらの調査からも、自分の英語力に不安を感じながら、喫緊の課題として授業の手順や教材の整備を必要としている教員の実情がうかがえる。

『小学校外国語活動研修ガイドブック』(以下、ガイドブックという)では、研修領域を「授業指導力」と「英語運用力」とに分けている。ガイドブックの記述から、「英語運用力」とは「発音やイントネーション、強勢などの音声面、文法力、とっさの英語の受け応え・あいさつや日常使う簡単な表現等」<sup>(7)</sup>を運用する力を意味していると思われるが、「外国語活動」を指導する教員に対し、具体的にどのような英語運用場面が想定され、そこでどのような英語力が必要か、そのためにどのような研修が必要かについて、明確な説明はない。具体的な指標が与えられず、漠然と発音や流暢さを向上させるには、校内研修はあまりにも短く、自己研修を含めてもそれに割ける時間は極めて限られており、それが教員の不安を増大させている可能性もあろう。また、教員は「英語学習者」としての経験は持っているものの、「英語使用者」としての経験や使用感覚をどれくらい持っているかは疑問である。英語をコミュニケーションの手段として使用する実感を持たないまま、「外国語を使うことに積極的な姿勢を見せる」「外国語を使うモデルを示す」という役割を果たさねばならないとすれば、それも不安を高める要因の一つになるのではないだろうか。

### 3 事前調査 その2

以上の調査結果を基に、講座案を「授業指導力」と「英語運用力」に分けて作成し、本講座対象地域の現役小学校教員に意見をうかがった。協力を得たのは、今まで英語活動などを積極的に行ってきた学校の中核教員、あまり英語に触れてこなかった学校の中核教員、および英語活動の指導経験が豊富な教員である。

「授業指導力」研修については、学校によって過去の英語活動経験や準備状況が異なるため、求める研修内容が大きく異なることが分かった。特に授業設計や教材作成については学校差が大きく、研修にも時間がかかる上、研修の指導者としては経験豊かな現場教員が好まれる傾向がみられた。ALT とのチームティーチング(以下、TT という)に関しては、2008年度当時、ALT の配置が決定していなかったこともあり、研修を求める声はそれほど強くなかった。

それに対して、一様に要望が強かったのが「英語運用力」の研修であった。いずれの学校でも、教員が自分の英語力や英語を使うことに対して強い不安を持っているという声が強く、文献調査で得た情報を確認する結果となった。教員は、子どもの前で堂々と自信を

持って英語を使いたいという気持ちが強い。それが不安となって表れているようであった。中核教員自身も英語には自信がないと感じており、特に発音については何をどう指導してよいか見当がつかず、専門の講師でなければ指導できないと感じていた。発音に加え、英語コミュニケーションの体験や教室英語の研修を求める声も強かった。外国語によるコミュニケーション能力を育てる指導を考える手がかりとして、まず自分自身が外国語によるコミュニケーションを体験し、実感を持つ必要があると感じているようであった。最後に、中核教員としての立場を離れ、個人としての意見もいくらか聞かせていただいた。英語使用経験や指導経験によって興味を持つ部分が異なっており、今後の研修需要の多様化を予想させた。

研修内容に関する意見と同時に寄せられたのが、研修方法に関する要望であった。知識として持っている英語が実際に使えないという意見や、体を動かして学ぶ研修でなければ身に付かないという声が聞かれ、教員の英語力への不安は、英語使用不安だけでなく、英語学習不安も含んでいることがうかがわれた。それは、大きく4つに分けることができる。

- (1)理解不安：説明を聞いても理解できない不安。
- (2)操作不安：説明は理解できても、自分で音声器官を思うように操作できない不安。
- (3)使用不安：練習場面では覚えていても、運用場面で使えない不安。
- (4)現実との乖離不安：学習が実際の教室活動と結びつかず、授業に生かせない不安。

これらの不安を軽減するためには、使用者(教員)の側に立ち、実際の英語運用場面に密着した研修の内容と方法の検討が必要であろう。同時に、それは教員自身が英語を発音してみることを面白いと感じ、英語を使ってみることを楽しいと感じる体験になるべきである。指導要領の「外国語活動」の解説に「コミュニケーションの楽しさを味わうことなしに、コミュニケーションへの積極的な態度を育成することは難しい」<sup>(8)</sup>とあるが、それは教員自身にも当てはまるのではないだろうか。

#### 4 講座設計方針と講座内容の決定

以上の調査結果に基づき、本講座で扱う研修を「英語運用力」分野に限定し、英語コミュニケーションに関する2講座と、教室活動に関する3講座を設けた。理解できない不安、操作できない不安に対応するため、講義系と活動系の講座を置き、各学校で自由に組み合わせ選択できるようにした。また、「授業指導力」分野は直接には扱わないが、講座の中に英語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる英語活動を積極的に取り入れた。使えない不安や現実と乖離する不安に対応するため、実際の授業活動を通じて発音や英語コミュニケーション力を伸ばすことを講座の設計方針とした。校内研修に割ける時間を考慮して45分を1単位とし、2講座同時に90分の実施も可能とした。以下は講座一覧である。

「小学校外国語活動講座 2009」

領域 1: コミュニケーション能力の育成と外国語活動

講座 1「地球語としての外国語コミュニケーション能力の育成」(講義 45分)

講座 2「英語によるコミュニケーションとは？～先生のための英語体験～」(演習 45 分)

領域 2: 教室英語力

講座 3「最初に知っておきたい英語発音のしくみ」(演習 45 分)

講座 4「ゲームで学ぶ教室英語」(演習 45 分)

講座 5「チャンツで学ぶ発音の基礎」(演習 45 分)

「小学校外国語活動講座 2010」

2009 年度の内容の一部変更を加えて実施した。「講座 3」と「講座 5」を 1 つの講座に統合し、新たに次の講座を加えた。

2010 年度 講座 5「教室コミュニケーション活動と発音のコツ」(演習 45 分 or 90 分)

### 5 「小学校外国語活動講座 2009」の実施

講座案内を送付した市内の全公立小学校 93 校のうち、22 校から 26 回の出張講座依頼があった。依頼校には英語活動の経験豊富な学校も含まれており、中核教員自身もさらに学びたい、新たな研修の視点を探りたいという気持ちを持っていることがうかがえた。また、依頼校に地理的な片寄りは見られなかった。表 1 は、講座別の合計依頼数である(実施数でもある)。

表 1: 「小学校外国語活動講座 2009」依頼(実施)記録

	領域 1		領域 2		
	講座 1	講座 2	講座 3	講座 4	講座 5
A 小			●	●	
B 小	●	●			
C 小			●	●	
D 小				●	●
E 小	●	●			
F 小			●	●	
G 小				●	●
H 小	●	●			
I 小				●	●
J 小		●			
K 小				●	●
L 小				●	●
M 小	●	●			
N 小	●	●		●	●
O 小				●	●
P 小			●	●	●
Q 小		●		●	
R 小			●	●	
S 小				●	
T 小		●		●	
U 小				●	
V 小				●	●
合計	5	8	5	17	9

依頼の結果から、2 領域とも現場の需要にあった内容だったと考えられる。日程の都合で第 1 希望の講座が実施できず、第 2 希望の講座を実施した学校が 2 件あったことを考慮すれば、教室英語力領域の需要の方がやや多かったと言える。

最も依頼数が多かったのが「講座 4」17 件で、それに次ぐ「講座 2」と「講座 5」の約 2 倍の依頼数があった。「講座 4」の 17 件中 14 件までが「講座 3」もしくは「講座 5」との組み合わせで申し込まれていることから、発音研修の需要の高さもうかがえる。しかし、事前に発音研修を求める声が高かったにもかかわらず、発音講座のみの依頼はなく、全て「講座 4」との組み合わせである。漠然とした発音練習ではなく、具体的な教室活動場面に根ざした発音指導を求めていることが示唆される。

活動系の講座と比較すると、講義系の「講座 1」と「講座 3」はどちらも依頼が少ない。また、講義系のみが単独で依頼されることはなく、常に活動系講座と組み合わせて依頼されていることから、体を動かして学ぶことが好まれる傾向がみられる。いずれも、準備調査で得た情報が、一般的にも正しいことを思わせる結果となった。

## 6 小学校教員の英語使用感覚

「外国語活動」の内容の一部として、外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験することが挙げられているが、教員自身はコミュニケーションを目的とした英語の使用感覚をどの程度持っているのだろうか。そして、この使用感覚に影響を与える要因として何が考えられるだろうか。それを本講座の受講者調査から探してみたい。

研修終了直後に無記名の質問紙調査を実施し、回答者の年齢、海外経験、英語活動の指導形態、および英語の使用感を尋ねた。調査への協力は受講者の自由意思によるが、ほぼ全員に近い受講者から回答を得た。分析の対象は、2009 年 8 月に本講座を受講した 15 校の受講者 291 名から得られた回答のうち、有効回答 264 名である。(Appendix 参照)

まず、過去 1 年間に「コミュニケーションを目的として英語を使った」と感じた経験の有無を尋ねたところ、「ある」と答えた者が 150 名、「ない」と答えた者が 114 名で、使用感を持つ人の方がやや多かった(図 1)。次に、回答者の年齢を 20 代から 50 までの 4 区分で尋ねたところ、40～50 代の割合がやや多い集団であることが分かった(図 2)。さらに、外国(英語圏とは限らない)に滞在した経験の有無と、主なものから 3 件について訪問先と滞在期間を尋ねたところ、回答者の 75%が外国滞在経験を持っていることが分かった。報告された滞在日数を合計し、経験なし、1～9 日、10～19 日、20 日以上の 4 区分に分類したところ、いずれもほぼ同人数であった。20 日以上の中には、特定の国(いずれも英語圏ではない)に 3 年以上滞在した経験者が 3 名含まれていた。また、10 日未満の訪問先は韓国や中国などのアジア諸国が多かった(図 3)。最後に、英語活動の指導経験の有無と指導形態を尋ねたところ、8 割以上が指導に関わった経験を持っていることが分かった。単独で指導した経験者と、TT の副主導的立場で指導した経験者とがほぼ同数で最も多く、TT の主導的立場で指導した経験者は 1 割に満たなかった(図 4)。

以上の年齢、海外経験、授業形態の 3 点と英語使用感の有無との関係を検証したところ、海外経験( $\chi^2=8.57$ ,  $df=3$ ,  $p=.03$ )と指導形態( $\chi^2=22.08$ ,  $df=4$ ,  $p=.0001$ )との間に有意な相関関係が見られた。海外経験については、20 日以上の滞在経験者の 7 割が

過去1年間に英語を使用したと回答しており、19日以下はいずれも5割前後に留まっている。また、指導形態については、TTの主導的立場で指導した者と単独で指導した者の7割以上が英語を使用したと回答しており、TT副主導の5割程度、指導経験なしの3割程度と比較して使用感の高さが顕著である。この調査は本講座に申し込んだ学校のみを対象にしたものであり、この分析から因果関係は判断できないなどの制限はあるものの、外国に長く滞在するだけでなく、英語活動を行う授業に中心的・主導的立場に関わることで、英語をコミュニケーションのために使用する実感が増す可能性があることを示唆していると言えよう。

図1: 英語使用感

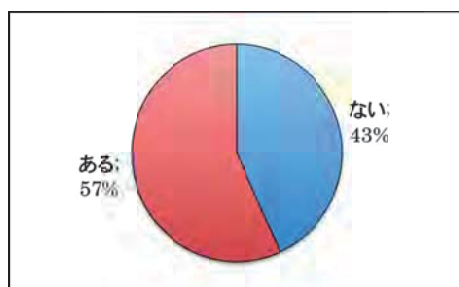


図2: 年齢

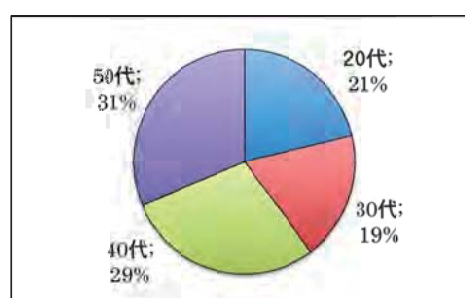


図3: 海外経験

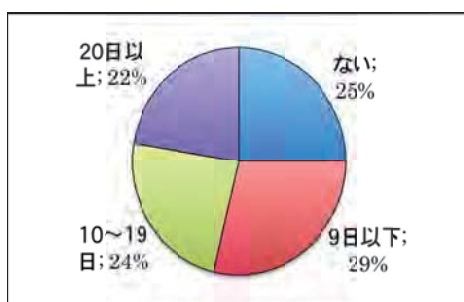
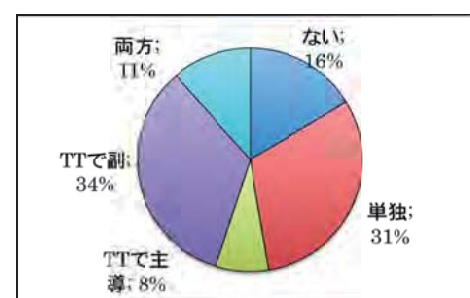


図4: 英語活動の指導形態



## 7 研修の評価と自由記述の分析

質問紙調査では、研修の評価と特に印象に残った点なども自由に記述していただいた。研修評価と自由記述から、講座内容が受講者の需要に応じたものであったか、また受講者が有益と感じる研修とはどのようなものであるかを探りたい。

### 7.1 研修の評価

研修全体とその有益度(自分にとって研修がどの程度役立つ内容であったか)の2項目について、「大変よかった/大変役立つ」から「よくなかった/役立たない」までの5段階で評価を求めた。その結果は表2の通りである。年度により内容や実施形態が多少異なるため、ここでは、同一内容を同一形態で実施した研修について報告する。

いずれの講座も、全体評価、有益度評価ともに高い評価を得た。回答のばらつきも少なく、受講者のほぼ全員が「大変よかった/大変役立つ」もしくは「よかった/役に立つ」と評価している。これは、一部には当時の緊迫した状況の反映でもありと思われる。「外国語活

動」の必修化を目前に控え、各学校とも全力で準備を進めていた時期であり、本講座においても受講者の真剣な取り組みが強く感じられた。その熱心さが、講座の評価を一層高めた可能性がある。そうした事情を考慮しても、本講座に対する満足度は高かったと考ええてよいだろう。特に有益度の高さから、受講者の需要に応じた講座であったと考えられる。

表2：講座別研修評価

	講座1&2 (2009,2010年度)	講座3&4 (2009年度)	講座4&5 (2009年度)	講座5 (2010年度)
回答者数	136名	74名	101名	121名
全体評価平均* (SD)	4.52 (0.54)	4.79 (0.40)	4.87 (0.37)	4.44 (0.56)
有益度評価平均** (SD)	4.51 (0.50)	4.83 (0.37)	4.80 (0.43)	4.47 (0.56)

\* 「大変よい」=5、「よくない」=1として数値化した平均値

\*\* 「大変役立つ」=5、「役立たない」=1として数値化した平均値

それでは、具体的に講座のどの点が有益だったのだろうか。それを質問紙の自由記述から探してみたい。質問紙全体の回答時間は5分以内で、自由記述欄は最後に設けられている。自由記述欄の記入は回答者の自由であり、未記入も少なくないことから、敢えて記述されたものは、特に強く印象に残った事柄であると考えられる。

## 7.2 講座概要と自由記述分析

### 7.2.1 「講座1」「講座2」

#### (1) 講座概要

「講座1」は、「外国語活動」の目的理解とコミュニケーション能力の素地とは何かについて考える45分の講義系の講座である。この講座では、World Englishesの視点から英語を捉え、世界における英語の役割に触れた。同時に、コミュニケーション能力とは何かを再考し、その素地育成に必要な知識、態度とは何かを説明した。

「講座2」は、45分の活動系の講座である。目的は、教員が英語コミュニケーション活動を体験することで、外国語活動の趣旨を理解することにある。講座内容は、受講者が英語コミュニケーションを体感し、コミュニケーションにおける言語の重要性はもとより、非言語の役割の大きさに気づく活動で構成されている。

#### (2) 自由記述の分析

分析対象は、「講座1」「講座2」を同時受講した学校、2009年度5校、2010年度2校の計7校の136名である。「講座2」のみ単独で受講した学校3校は、分析の対象から除いた。自由記述の内容を9項目に分類し、項目ごとの回答者の割合を集計した(表3)。一人の記述の中で複数の項目に触れている場合があるため、合計は100%を超えている。

「講座1」「講座2」で最も多く記述された項目は、「①多様な英語理解から発音の不安減少」(24.3%)であった。「講座1」では世界における多様な英語について話した。そのため、記述には、『色々な英語(Englishes)があると分かったので恐れず発音していこう』『発音は国によって異なることが分かり、少し安心した』とあったが、これは、受講者が



World Englishes の概念や、多様な英語(特に発音)を知ることで、自分自身が考えている模範的な発音の枠組みを変化させたものと推測される。これにより、日本人の英語を受け入れ、発音に対する不安を減少させていったと思われる。教員は、事前調査において発音に関する自信のなさや不安を表していた。この不安を取り除くためには、発音学習とともに、世界における英語の役割などを知る必要もあるだろう。また、教員として、「外国語活動」でどう指導していくのか、何のために指導するのかを考えるためにもこうした知識は有益だと考える。

表3:「講座1」「講座2」自由記述分析

記述内容の分類	回答者割合
① 多様な英語理解から発音の不安減少	24.3%
② 外国語活動の目的理解とコミュニケーションの重要性	13.2%
③ 楽しい・分かる	13.2%
④ 意欲の向上	8.8%
⑤ 実践的活動	8.8%
⑥ 非言語の重要性	5.1%
⑦ 感謝	19.9%
⑧ その他	5.9%
⑨ 未記入	38.2%

次に多く記述された項目は、「②外国語活動の目的理解とコミュニケーションの重要性」(13.2%)であった。この項目もまた「講座1」の内容から導き出されたものである。この講座では、外国語学習を始めるにあたり、小学校学習指導要領に示された目標、内容を読み解き、理解を深めた。このような作業を行うことで、漠然と捉えていた「外国語活動」の意味や目標を明確にすることができたと思われる。受講者からは、『外国語活動の本質、狙いについて、話を聞いて大いに納得、実感した』『コミュニケーションの素地について自分なりに実感できた』などの意見があった。2009年度の段階では、「外国語活動」の方向性を明確にすることが必要とされていたと思われる。しかしながら、2009年に12名の記述があったこの項目であるが、2010年にはこれに関して記述した者はいなかった。このことは、2009年から2010年への需要の変化を感じ取れる結果となった。

「講座2」に関する記述として、非言語の重要性の記述が僅かであるが見られた(5.1%)。この講座では、非言語による意味伝達の大きさを説明し、その後教員同士で英語コミュニケーション活動を行った。活動では、非言語を効果的に使ってコミュニケーションを行うことを意識した。記述には、『非言語で伝えることの割合の高さに改めてびっくりした』『コミュニケーションにおいて非言語で送られることが、非常に大きいことに気づいた』とあり、非言語をうまく使うことで、意味伝達が促進されることを実感したのだと想像する。このような気づきが、コミュニケーションとはどのようなものかの発見につながると同時に、自らが英語でコミュニケーションを行う際の自信につながると考える。そうした意味において、コミュニケーション活動を体験するような講座は有益だと考える。

## 7.2.2 「講座3」「講座4」「講座5」(いずれも2009年度)

## (1) 講座概要

「講座3」は、英語音声の基本的特徴の一部を解説する45分の講義系講座で、解説に続き、英語ノートで扱われている単語で発音練習を行い、理解を深めるものである。

「講義4」と「講義5」は、それぞれ45分の活動系講座である。「講座4」では英語ノートに含まれるカードゲーム活動を取り上げ、英語によるコミュニケーションの実際を示しながら、活動指示に必要な英語表現を繰り返し練習する。「講座5」では英語の音声特徴を確認しながら、英語ノートに含まれるチャンツとそれに関連した歌を用いて、単語や語句を練習するものである。

## (2) 自由記述の分析

分析対象は、「講座3」「講座4」を同時受講した4校74名と、「講座4」「講座5」を同時受講した6校101名である。実際の受講者はこれより多いが、実施条件が異なる3校は分析の対象から除いた。自由記述の内容を9項目に分類し、項目ごとの回答者の割合を集計した(表4)。一人の記述の中で複数の項目に触れている場合があるため、合計は100%を超えている。

表4:「講座3」「講座4」「講座5」自由記述分析

記述内容の分類	回答者割合	
	講座3 & 4	講座4 & 5
① 発音のしくみ	27.0%	29.7%
② 指導や練習のしかた	24.3%	30.7%
③ 楽しい・分かる	23.0%	18.8%
④ 実践的活動	13.5%	7.9%
⑤ 意欲の向上	12.2%	9.9%
⑥ 不安と安心	8.1%	14.9%
⑦ 感謝	5.4%	4.0%
⑧ その他	12.2%	12.9%
⑨ 未記入	23.0%	21.8%

どちらの研修にも共通して多かったのは「① 発音のしくみ」に関する記述であった(27.0%, 29.7%)。講義系、活動系のいずれの受講者も、発音の仕組みや発音のしかたに関する学習が有益だったこと記述している。事前調査で発音研修を求める声が大きかったが、これらの講座はその要望の一部に応えるものであったと思われる。記述には、大学までに受けてきた発音学習の不足を述べるものも多く、今後も「外国語活動」の指導目的に応じた発音研修が必要だと思われる。

発音と同程度に多かったのが、教室英語の使い方と練習のしかたに関する記述であった(②「指導と練習のしかた」)。実際のゲーム活動の中で指示表現に触れ、観察と体験を通じて学習することで、教室英語を使う具体的イメージが掴めたことを述べる記述が目立った。また、『リズムとして捉える』『動作をつける』『まねから始めて繰り返す』『意味を意識し

て『繰り返すと身に付く』など、学んだ表現を定着させるための工夫を述べた者も多かった。このことから、教室で使う英語力を伸ばすには、単に役立つ表現を暗記するのではなく、視線、身振り、声調などを伴った身体表現として使われている英語を観察し、体験する研修が有益ではないだろうか。

肯定的な記述が多い中で、不安を表す記述も見うけられた(「⑥不安と安心」)。実践的で体験型の研修は、『声を出すのに抵抗がある』『苦手意識がある』『自信がない』などの不安感を伴う可能性がある。不安の背景は様々であり、『英語を話すのはむつかしすぎるというイメージがあったが、今日のような英語なら少し使えそうな気がした。』という記述から推測されるように、英語に対して漠然と過大な不安を抱いている場合がある。また、最初から高すぎる目標を掲げ、どこから手をつけてよいか分からず不安を高めていると思われる記述もみられた。受講者の現状を認識し、目標を絞り、段階的にできることを増やすことで、こうした不安をある程度軽減できるのではないだろうか。また、『発音は苦手。でも CD の発音を聴いているとほっと分かってくる楽しさがあった。(中略)がんばってみようと思えました』などの記述に見られるように、教員自身が学ぶ楽しみを体験することで、不安を乗り越える手がかりになることもあると思われる。

### 7.2.3 「講座 5」(2010 年度)

#### (1) 講座概要

2009 年度の研修で、教室活動場面に根差した発音指導に対する要望が高かったことを受け、2010 年度には、「教室コミュニケーション活動と発音のコツ」という新たな講座を設けた。まず、英語の発音方法について、日本語との対比からの解説を行った。その後、英語ノート 2 の中から日付の言い方をとりあげ、コミュニケーション活動を行った。

この講座は、45 分版と 90 分版を用意し、どちらかを選択してもらった。45 分版も 90 分版も、発音講座とコミュニケーション活動の組み合わせであることは変えず、解説を簡略にしたり、活動の数を増減させることで時間を調整した。

#### (2) 自由記述の分析

分析対象は、「講座 5」(2010 年度)を受講した 6 校の計 121 名である。自由記述の内容を 8 項目に分類し、項目ごとの回答者の割合を集計した(表 5)。一人の記述の中で複数の項目に触れている場合があるため、合計は 100%を超えている。

最も多く記述された項目は、「①発音の方法について」の 17.3%である。①の項目には、『s、sh、th の発音の違いがよく分かった』『日本語との対比での指導は分かりやすかった』などの記述がみられたが、この講座では、英語の/s//ʃ//θ/の音という、特定項目のみに限定して解説と活動を行ったことから、一回完結の短時間の研修講座でも、分かりやすさや何かを学習したという達成を実感することが可能になったと推察される。

その反面、「⑦ その他」の項目に分類された記述の中に、『母音の発音についても学習したい』『April の発音がうまくできなかった』といった意見が見られ、講座の目標を限定する場合、分かりやすさを確保できる一方で、受講者によっては、需要に合わない講座になる可能性がある。分かりやすさを犠牲にすることなく、受講者の需要に応えるためには、研修を継続的に受講できる体制づくりが望まれる。

表 5:「講座 5」(2010 年度)自由記述分析

記述内容の分類	回答者割合
① 発音の方法について	17.3%
② 楽しい・分かる	15.7%
③ 意欲の向上	4.1%
④ 実践的活動	0.8%
⑤ 感謝	19.8%
⑥ その他	13.2%
⑦ 未記入	51.2%

ほとんどの講座で共通する記述も見られた。「実践的活動」の項目が「講座 1&2」で 8.8%、「講座 3&4」で 13.5%、「講座 4&5」で 7.9%となっており、ここには、『すぐ使えそうです』『実際に使える英語を研修できてよかった』という、学んだことがすぐに活かせることを評価する記述が多くみられた。

一方、「講座 5」(2010 年度)では、「④ 実践的活動」の項目の割合が 0.8%であった。この講座は、発音の仕方の解説の後に、学んだ音を実際にコミュニケーションの中で使用することに主眼を置いた実践練習であった。そのため、英語ノートからの題材ではあったものの、活動が教員向けになってしまい、そのまま授業で使うには難しすぎるものとなった可能性がある。日々、様々な業務に追われている教員を対象とした研修の場合、受講内容が即、明日の授業でいかせる、ということが、ことのほか重要な意味を持つことが分かる。今後の講座では、扱う言語材料から活動内容にいたるまで、児童を対象にした指導にすぐに活用できるという点を熟慮することが必要だと思われる。

全ての講座において多くみられたのは、楽しかった・分かったという記述である。「楽しい・分かる」の項目で、「講座 1&2」で 13.1%、「講座 3&4」で 23.0%、「講座 4&5」で 18.8%、「講座 5」(2010 年度)で 15.7%の記述がみられた。講座全般に対して単に『楽しい講座でした』『よく分かった』という声に加えて、ある特定の事項に関して、なぜ楽しかったのか、分かったのかの理由を明記した記述もあった。

この理由の記述をみると、分かったという声は、『段階的指導で分かりやすい』『ピンポイントの目当てで分かりやすい』といった、分かりやすい講義の設計に基づいたものが多かった。また、楽しかったという記述は、『それらしい発音になって楽しかった』『発音するのが楽しくなった』『コミュニケーション活動が楽しかった』『動きがあって楽しかった』などで、挑戦してみると自分で発音できた、人と交流できた、実際に自分で身体を動かした、といった楽しさから出てきた声のようであった。

目標を限定し指導手順に配慮した、分かりやすい講義があり、それに続いて身体表現を伴う発音練習や、非言語表現を駆使したコミュニケーション活動など、本当の意味での英語使用感覚を体験する演習が行われる。このような研修が、受講者の『分かる・楽しい』という印象を生み出すのではないだろうか。『できる』『分かる』『楽しい』という気持ちが積み重なれば、その後で、『できそうな気がする』『やってみたい』『もっと学びたい』という意欲の向上につながる可能性がある。今回、「意欲の向上」を表す記述は、どの講座も 1 割程度にとどまっており、研修の継続が望まれる。

## 8 英語運用力の研修に求められるもの

以上の考察に基づき、英語運用力の向上に有益だと思われる研修内容と留意点を5点にまとめた。

### (1) 英語によるコミュニケーション活動を体験する研修を行う

子どもに対して外国語を使うモデルを示すためには、教員自身が英語使用者としての実感を持つ必要がある。そのためには、非言語の使用も交えながら、実際にコミュニケーションの手段として英語を使う活動を体験する必要がある。授業で英語を使うこともその一例である。「外国語活動」に主導的立場に関わることで、英語使用者としての実感を高めることができる。

### (2) 「外国語活動」の内容や目的に応じた発音指導を行う

世界における英語の役割を理解し、発音練習の目標について考える。その上で、教員の側に立ち、発音の学習項目を厳選し、優先順位を決めて指導するべきである。また、教員の現状を認識し、目標を絞り、段階的に指導することで、自信を育てる研修を目指す必要がある。体験的な学習を中心としながら、適宜理論を取り入れ、継続して研修することが望まれる。

### (3) 実際の活動場面に密着した教室英語の指導を行う

単に役立つ表現を暗記するのではなく、言語として英語が使用される場面を観察し、体験する機会を提供する。表情などを含めた身体表現としての英語使用に直接触れることが重要である。1回完結の研修では、指導目標を限定し、短時間でも達成感のある研修を目指す。

### (4) 教室活動に直結した活動や題材を使用する

授業ですぐ役に立つ活動は、教員の学習意欲を著しく高める。授業でそのまま使用できる指示表現や会話の型を提供する。さらに、それを使う研修を経て、自分で使うことができるようにする。練習用の活動や単語は英語ノートなどのよく使う教材から選ぶ。

### (5) 教員自身が、英語を使う楽しさを実感する研修を行う

積極的にコミュニケーションを図る態度を育てるには、教員自身が英語を使うことを楽しいと感じる経験を持つことが極めて重要である。「楽しい」気持ちにつながると考えられる、「分かる」「できる」「人とつながる」「体を動かす」活動経験を増やす。同時に、学習本来の楽しさを感じることができるよう、英語の使用不安や学習不安を軽減するよう努める必要がある。

このような方向で設計された英語運用力の研修は、授業指導力と深く関わり、英語によるコミュニケーションを強く意識したものになる。同時に、受講者の認知的要因や動機付けを重視したものにもなるだろう。

## 9 おわりに

2011年4月から「外国語活動」は全国の小学校で全面実施されている。それに伴い、教育現場の環境や教員の意識にも変化が生じている。既に、本講座の実施中にも感じられた需要の変化は、さらに多方面に広がることが予想される。また、今後「外国語活動」の成果や課題の検証も行われるだろう。「外国語活動」がどのような位置づけになろうとも、コミュニケーションの喜びを伝える手段としての英語であることを忘れず、研修の在り方を考

えていきたい。

### 謝辞

本講座の事前準備にあたり、ご助言やご意見をくださった皆様、また、本講座をご利用くださり、アンケートにご協力くださった皆様に、心より感謝申し上げます。

### 注

- (1) 岡山市総合教育センター（2008）『総合教育センターだより』通巻 No.131.
- (2) 文部科学省（2008）『平成 19 年度小学校英語活動実施状況調査集計結果』
- (3) Benesse 教育研究開発センター（2006）『第1回小学校英語に関する基本調査(教員調査)』  
<http://benesse.jp/berd/>（2011 年 11 月現在）
- (4) 日本生涯学習総合研究所（2007）『公立小学校の英語活動に関する現状調査』  
<http://www.shogai-soken.or.jp/>（2011 年 11 月現在）
- (5) 松畑熙一・中野宏・名合智子・橋内幸子・垣見益子・佐生武彦・佐藤大介（2006）「中国学園小学校英語活動支援講座」(文部科学省小学校英語活動地域サポート事業)報告（2）受講生アンケート報告』『中国学園紀要』5. pp.49-58.
- (6) 西崎有多子（2009）「小学校外国語活動(英語活動)における指導者の現状と課題～学級担任が単独で行う授業に向けて～」『東邦学誌』第 38 巻第 1 号. pp.53-71.
- (7) 文部科学省（2008）『小学校外国語活動研修ガイドブック』 p.16.
- (8) 文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』 p.10.

## Appendix

「小学校外国語活動講座」質問紙

1 回答者ご自身について、以下、該当するものに印をつけてください。

(1) 年齢をお答えください。

20才以下	30～39才	40～49才	50才以上	合計
56人	49人	76人	83人	264人

(2) 今までに、外国を訪問したり滞在したことがありますか。

ない

ある → ある方は、主な訪問先と滞在期間をお答えください。

なし	1～9日	10～19日	20日以上	合計
66人	76人	63人	59人	264人

(3) 過去1年間に英語を使いましたか。あなたが「英語を使った」と感じた範囲でお答え下さい。

使わなかった

使った

使わなかった	使った	合計
114人	150人	264人

2(3) 今までに英語活動を担当したことがありますか。

全くない

主に単独で担当したことがある

主に TT で主導的立場で担当したことがある

主に TT で副主導的立場で担当したことがある

単独も TT も両方とも同じくらい経験がある

その他

なし	単独	TT 主導	TT 副主導	両方	その他	合計
82	20	89	30	43	0	264人

3 今日の講座について

(1) 講座内容を評価してください。

大変よかった    よかった    どちらでもない    あまりよくなかった    よくなかった

(3) 今日の講座は、あなたにとって役立つものでしたか。

大変役立つ    役立つ    どちらでもない    あまり役立たない    役立たない

(4) 講座について、感じたことやご意見、今まで知らなかった発見などあればお聞かせください。